

やっぱりだまっていられない 弓削通信・復活します！

今はどんな時代か

合併後の上島町はすでに5年半が経過した。平成の大合併は1万人を最小自治体の目標人口として進められたが、上島町は合併時8,098人から昨年末7,640人へと、穏やかな言い方をすれば漸減している。しかし実は、子供が生まれながら年平均百十数人減少し続けているわけで、この調子でいけば50年後は・・・そんなことあ知りませんか？

島と島の合併ということでその点では希少性は持ちつつも、自治体も住民も人口減少に対する危機感の希薄さで、これまた無類の希少性を持っているのではないかと、そのことにまず危機感を募らせる。今はどんな時代かを少しは考えてみませんか。



間に合わせ

一昨年、上島町二期目の選挙に際しては生名1名、岩城2名、弓削2名の新議員が議会に入った。期待の5人は議会に入り、自らの信念や公約に基づき活発な議論を展開しているか？。議会で論議されていることが十分有権者に伝えられているか？。

残念と言うほかないのが現

実であろう。

自治体は合併してすぐ「上島町元気アップ計画」(上島町総合計画)をつくり町内全戸にも配布した。それは町の将来に関して官民一致の危機感を持ちましょうという宣言であったはず。

綾小路きみまろの言いぐさではないが、あれから5年。人口は、日欠け、月欠け、年欠けに、2%ずつ欠け続け心がけが間に合いません。

平成22年度は先の総合計画10年の折り返し点である。人口減に歯止めをかけるべく取り組んできた行動に関して検証をせねばならない時期でもある。それなのに議会ではそこへ水を向ける議員の一人だになく、相も変わらず担当課へ問い合わせればすむ類の質問や、意味不明の質問が議員様方から発せられている。

議会傍聴をしていて感じることは、この人たちの視野には町の将来も、いわんや現況も無いようである。

わかっちゃいるけど

読み返してもそれなりによくできてる総合計画ではあるが、絵に描いた餅とさせぬためには何か求められているか。

すでに賢明な読者にはそれがわかっているながら、なお知りませんか？

八代美さんの故里へのまなざしは故里の人口減の歯止めのヒントが隠されているようにも思うのだが、肝心の故里の人々がそんなことでは、どんないいヒントがあっても生かされまい。残念だ。

(平山和昭)

島と都会をつなぐたとえば助け合い 岡八代美さん



2010/03/26

【写真説明】岡八代美さん(向かって左)と筆者。文集「わかちと」は毎年発行。八代美さんこだわりの文集。全職員の仕事が凝縮されている。

施設に勤務。無認可保育所に

一歳から東京の養護社法人「中都」の理事長。「なかと」とは言うまでもなく彼女の育った弓削中都地区のことだ。二十

てはマイホームという観点から、福祉先進国では標準であった個室を頑強に主張し区からの譲歩もかちとつた信念の

利用が一番、弱者一番

利用が一番、弱者一番

はじまり「保育園・うさぎとかめ」「特別養護老人ホーム・つるとかめ」「デイサービス・つるとかめ」「渋谷区グループホーム・笹塚」と一貫して理想を追い求めてきた。

八代美さんに教わること

人でもある。

老人ホームと保育園を同じ建物内に設け、日常の幼児と老人の交流を通じて、本来世の中にあるべき老若の精神的絆を強めることも実践してきた。

何が彼女をそこまで駆り立てるのか。田舎に残してきた老母を引き取り、母の得心のいく介護を特養をたちあげたことからも垣間見えるように、どんな施設であれ「利用者一番」「弱者一番」の立脚点からものごとを考えるからにほかならない。

故里を遠くにて想う

先日八代美さん帰郷した。久しぶりにお目にかかり久闊を叙した。帰郷の理由が、人に貸していた旧宅と土地が、

都会で生き場を喪った人の一時避難所に活用できないかの検討と聞いたとき、田舎から都会に出て、都会で生き場を喪い、田舎にも居場所を喪っている人々に、どう立ち直りのきっかけを提供できるかと、一介の施設経営者が思いをはせているすごさに言葉を失う心地だった。

都会生活は豊かであるがにみえる反面、ちよつとしたつまづきでたちまち、文字通り路頭に迷う。それは一昨年暮れあたりからの報道で全国民が承知した。都会で生きたことのない人には実感しづらいかもしれない。

ヒントがあっても



翻って我が町では、じり貧にむけ人が減り続け、自治体の施策も、それに関わる者たちの想像力の欠如、やる気のなさ、怠慢等で殆ど見るべき成果を上げ得ていないのが事実だろう。ひとり行政職員や首長のみでない。施策に無関心だったり、いつまでも個々人の損得のみに軸足を置きがちな住民の姿勢もあげつらう。



都会と島をつなぐ たとえば学びあい 大出俊幸さん

歴史の事実を掘り起こす人生

大出俊幸さんは先頃まで東京の出版社「新人物往来社」の名物編集長だった。出身はおとなりの因島重井町。「新人物往来社」は歴史物の出版では斯界一の定評がある。かたわら地方の郷土史家やその研究の発掘、出版も数多く手がけてきた。月刊雑誌では歴史読本が有名。

大出さんは歴史出版とは歴史上の事実をデータとして読者に提供することだという。自らは幕末史、ことに新撰組の権威。新撰組のことなら大出にきけ、で通っている。ドラマの時代考証に大出さんの教を乞うのは欠かせない。

千葉県流山市が幕末動乱期の新撰組の活躍の舞台であったことからそこに居を構え、新撰組研究と隊員の顕彰をしている。「新撰組友の会」「民学の会」「本の会」「因島自由大学」「東葛流山懇話会」などたくさん自主的学びの場も主宰。

「因島自由大学」は大出さんが学長。中世ヨーロッパのカタルニアで自由、自主、自治の精神のもと市民が自ら学びの場を主宰した市民自由大学にちなみ命名したと聞いたことがある。

毎年一回、かつて大出さんが教師をしていた因島田熊中学校の教え子(昭和40年頃卒)が現地スタッフとして昨年までに14回の継続を数えている。聴衆は関東、東北、九州、アメリカと多岐にわたり、数十人が毎年来島する。今年も6月に予定されているようだ。



大出さんの目指すところは、島に来る人と島の人とが交流することを通じ、島の人が一歩外に踏み出す。そして未知の土地で学び交流する喜びを味わってほしいということ。地方に住む私たちが歴史を学び、歴史的に物事を見、事実をデータとして受け取り、そのうえで自ら判断をくだす。それが大事なのだとおっしゃる。

この活動も大出さんの本業であった編集長時代の人脈で多士済々の講師が来島された。企画を地元が立て、そのうえで講師へのつなぎを協力させてもらえるようになればいいのだがと大出さん。都会と島をつなぐ。故郷への深い愛があるからだと思う。大出俊幸さん(向かって右)と(平山和昭)

はじめに
 春に三日の晴れ間なし、とは昔の人ほうまいこと言いますね。
 旧? 「弓削通信」時代には「チン説百人一首」を書かせていただきました。折にふれ感じるオバはんのつぶやきが読者の皆さんの心に響いたかどうかは存じません。
 このたびは、押しも押されぬ大オバはんは到達した筆者の「こんなことはなかった、少し前までは・・・」みたいなテーマで書き続けられたら

青木喜代子



先日電話でコーヒー豆を注文した。ていねいに応対してくれた女性には「おそれいりますがこの特典はFAXのみです。改めてFAXで注文しなおしてください」「え? 今あなたに直接注文してはいけませんか?」「ハイ!」
 なんかに変! と思いつつFAXの送信ボタンを押した。夜の電話のベルに驚いて起きたらFAX。見ると得意先からだ。こんな真夜中まで仕事とはと感心していたら、なんとタイマーをセットして退社するらしい。
 「FAXは昼間にお願致します」若い事務員あてにFAXをした。
 近頃は何でもかんでも詳しく

と思います。木戸口通つてこのコラムに入り、おもしろくなくともごめんなさい。決して木戸銭返せ、なんておつしやらないでね。
 市外局番を見ればおよその地域も見当がついた。せめて電話のやりとりがあればそれなりに人とのつながりを感じることができよう。@や/の機械相手におもしろくもない。
 突然だが元宇宙飛行士の秋山さんは、ケイタイもパソコンもすて、山の中で自給自足の生活をされている。右岸から左岸へ。その顔はとて誇らしげで満足そうに見えた。パソコンは便利よ。うん知ってるよ。でも私の中で、あったら便利なものはなくてもいいものなのね。ペンだこ作りながら書けばボケ防止にもなるし、と憎まれ口をたたいているが、少々不安。

春つらら。尾道へ行ったら映画をみませんか



尾道の若者が復活させた
 駅前映画館シネマ尾道の上映スケジュールです。
 詳しくは ☎0848-24-8222

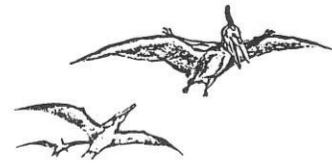
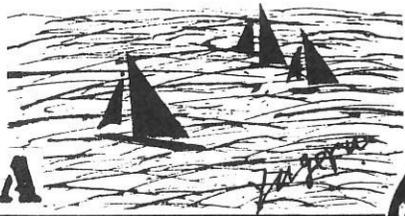
HP <http://www.cinema-onomichi.com/>

上映日	上映作品
4月17日	『サヨナライツカ』
~	『イングロリアス・バスターズ』
4月23日	『ファッションが教えてくれること』
4月18日は貸館のため別スケジュール	
4月24日	『サヨナライツカ』
~	『ジュリー&ジュリア』
4月30日	『クヒオ大佐』
5月1日	『恋するベーカリー』
~	『ジュリー&ジュリア』
5月7日	『クヒオ大佐』

シネマ尾道映画hpより抜粋

☆ツイッターまがい (1)

時の総理や閣僚もはまっているというインターネット簡易掲示板。Twitter・ツイッターという。140字の文字制限があるが参加者が何百万人もいるので、書けば必ずだれかの目にとまる。上島町岩城・積善山の桜についても、すでに誰かが世界中にその情報を流しているだろう。
 先日は積善山の桜祭りだった。3000本と公称される桜だが、ここにも高齢化の波が押し寄せている。
 3月議会でも岩城の議員が手ぬるい質問をしていたが、積善山の桜は風前の灯火だ。寿命、あるいは病気で賞相になる一方の桜。老桜が一杯がんばってはいるが、このままではたちまち看板に偽りありとなる。町の指揮官はどう思っているのだろう。



「ロングテール」という言葉を
ご存じの方はインターネットビジネスに
詳しい方だろう。意味は文字通り「長い尾」。
インターネットを使った商品販売で、売れ筋
でない、売れないとされてきた商品を
扱っても商売として成り立つことを
主張した理論だ。

販売数量



ロングテール

品目

時代をみきわめる。足元を見直す。

消費者の購買行動の様変わり、大型百貨店、大型量販店（スーパーなど）あるいは町なかの小売店の現場で様々な変化を引き起こしている。今治から大丸が引き上げたり、松山で三越が規模縮小したり、身近では因島のサテイが店をたたんだり大型店舗がつぎつぎ経営難で統廃合、縮小を強いられているようすだ。

大型店のみならず小売店の衰退はことに著しい。小売店、ことに我々が住む地域のように、日常必需品を扱う店でも、その渦に飲み込まれずにいるのは至難のわざに思える。

小売業の生き残る道は？



言うまでもなく小売店としてそれを維持する店主、雇われ人などの生活資金を稼ぎ出せねば成り立たない。同業者との競争、住民の多寡、所得格差など色々な要因があり、そのうえで世界相手の激しい価格競争に否応なく巻き込まれる。

仕入れを安く、在庫管理費を安く、販売経費を安く、そして利益は高く設定しようにもままならない。

ところがインターネットを利用したネット販売では、膨大な商品を低コストで取り扱うことができる。なぜかということは、以下のように視点を移せば見えてくる。

活用しよう 人も物も知恵も みんなネットにつながっている

否応なくインターネット時代

インターネット・オンラインビジネスでは無限ともいえる売り場スペース（ウェブサイトとかコンピューターにデータとして）を用意することができ、実物は地代の安い場所に在庫スペースを設置することもできる。宅配網の飛躍的進化より従来の物理的制約の多くは乗り越え可能となった。



「ロングテール」は店舗での品揃えの対象にならなかつたような商品群のことを指し、タテ軸に販売数量、ヨコ軸に品目を、販売量の多い順に並べてグラフを描くと、販売量の少ない部分がなが〜く伸びるさまを「ロングテール」（長い尻尾）に見立てた呼称だ。誤解の無いように言い添えておくと、個々のネットショップが無数の品揃えをしているという意味ではない。ネット上には無数の商品があるということと、インターネット上で検索すれば、ほぼ一発で欲しい品物にたどり着ける、ということである。

売れ筋ではない商品、滅多に売れない商品（ニッチ商品とも呼ばれる）などの多種少量販売の分野でもインターネットの活用で、ネット上の消費者は無限大に近いことから、大きな売り上げ、利益を得ることができるという「ロングテール」とはなにか？

一般に商品販売では「80対20の法則」（全売り上げの8割は全顧客の2割の財布から出ているという経験則）が成立することが知られている。そのため売れ筋でない商品は売り場から除かれてしまう。

商品とは何らかの必要に迫られて生産される。潜在的顧客は必ずいる。そういう顧客の需要に、どこかの誰かさんが応えるというのが「ロングテールにおける商機」と位置づけられる。

インターネットは顧客と1対1の関係だが

狭い地域内での小売業では、少子化や高齢化の影響をもろに受ける。いずれ事業の永続が困難となるのはあきらかだろう。一方で消費者は欲しいものには金を払う。そのように考えれば、広く無限大の消費者に向け、ネット上に公開された掲示板で「私のところにはあなたの欲しい商品があるよ」と情報発信することは、1対1でありながら1対∞の広告にもなる。数年に1回しか売れないような商品でも、インターネット上の膨大な消費者の中には欲しい人も多くいるだろう。そうした商品を数多く用意することで大きな売り上げを期待することができるのはネットで世界中の消費者がつながっているからにほかならない。

移住者が入ってきやすい町に

ネットで買い物をする人は年々増える。すでに無料短文掲示板「ツイッター」を活用し、農協や仲買に頼らない顧客獲得に成功した農家だってある。我が町でもロングテールに目をつけた人の移・定住促進策が真剣に論議されるべきだろう。



B面には町内の一つの事例として都会から上島町岩城移住してきた若者が、ネットショップを通じて、過疎地での新たな商いに挑戦している姿を紹介する。



尾道で映画
次の通り割引します。
大人・高校生以上 当日1,800円 → 1,500円
3歳以上・小・中学生 当日1,000円 → 800円
シニア (60歳以上) 1,000円

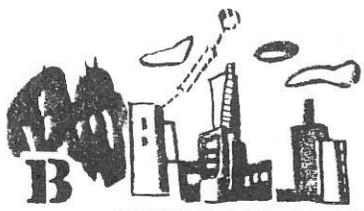
場所	尾道しまなみ交流館
上映日程	5月22日(土)
上映時間	第一回目 10:00~ 第二回目 13:00~ 第三回目 15:30~

お問合せ先:生涯学習課 (0848) 20-7444
主催:尾道市教育委員会・(株)フェニックス

特別割引券 (本券1枚4名様まで有効)

弓削通信に5枚あります。
電話 77-3072 まで

☆会員募集
技術・制作・地域貢献・作品発表の場と
ドラム・作曲・通じたい
オーディオ・立ち上げ
ビデオ・制作
T.V.への投稿・先・弓削通信



ぽんぽこらんど

岩城の古崎公一(公ちゃん)さん夫妻は「ぽんぽこらんど」というネットショップを運営している。開店して2年あまりだ。公ちゃんは、インターネットブログとネットショップで「島みがき」をしたいと思っている。



岩城さくらまつりに初出店

ブログとショップで「島みがき」

扱う品目はいまのところ地元岩城で生産される芋菓子、柑橘類、地元U水産会社の加工、半加工製品、県内産柑橘を使ったジュース、自分たちで企画製品化した焼き物(積善焼き)など。読者におなじみの商品も多い。もちろん扱う品目を広げたいと考えている。

「ぽんぽこらんど」の運営は妻の幸江(YUKIE)さんが店長ということで、2008年1月に開店を決意。ネットショップの作り込みをし、やっと軌道に乗ってきた。「生産者の顔の見える安心して口に運べるもの」をモットーにしている。それは、食の安全がどこにあるのかわからない時代だからこそ、という危機感に根ざしている。2児の母親として当然ともいえる姿勢だろう。

◆島を磨いて再び輝かす

YUKIEさんは岩城出身。夫の公ちゃんは福井県福井市の出身でアメリカで大学を卒業。帰国後実父の経営する会社の東京支店長をしていた。

都会特有の人間関係、拝金主義的考え方、満員電車通勤がいやで妻の実家のある岩城に移住を決意した。5年前だ。

初めて訪れた岩城で登校する中学生が気持ちのいい挨拶をしてくれたこと。まだ生まれてはいなかった我が子を、その元気で挨拶の出来る島の子にだぶらせて移住を決心したという。

◆島の良さに気づく

ことし3月、公ちゃんは働いていた地元企業を退職、いよいよ二人で「ぽんぽこらんど」に専念、独立することにした。

さて一家の生計をネットショップに託すのに不安はないのだろうか。

この記事を書くに当たりお二人に10項目のメール取材をさせていただいた。

アンケートへの回答を読んで強く感じることは、自分たちの取り組みは「岩城の生産者と消費者を結ぶ」のだという決意だ。ことさら大上段にふりかぶるのではない。そうしなければそもそもネットショップは成り立たないからだ。

ネットショップの成否の鍵は?という質問にYUKIEさんはこう回答している。

「鍵は私たち自身です。私たちが島の方たちとうまく付き合っている商品を提供すること。2年2ヶ月のショップ運営でわかっていることは、島の商品はいいものだということ。

どこに出しても美味しいと言われる。あとは私たちが精一杯出来ることをして、生産者と消費者をしっかりとつなげていけば、自然とお客様は増えてくると思う」と。緻密かつ楽天的でいい。

◆三方よしの心欠けては

うそかまことか農家は自分たちが食べる農産物は、無農薬あるいは減農薬でつくると言われる。もしそれホントのことなら、商品としての農産物は農薬まみれという背反を連想させ、製品の生産性を上げる方法論と、消費者としての選択基準論が真っ向から衝突することとなる。

「自分が食べて安全で安心なものしかお客さんには出せない!」とする町内U水産の社長の姿勢とYUKIEさんの立脚点が一致した。

回答をみれば、彼らがなにをしたがっているのかが見えてくる。乱暴を承知で大きく括れば「志」に真正面から取り組むということになるのか。

実はそのことは、我が町の将来を考えたとき、この町で生きてこれた、あるいは生きていく我々こそが果たさねばならない「つとめ」を指しているのではないのかとおもうのだが、どうだろう。(平山和昭)

お便りから

今日は、通信をありがとうございまして。先日、野鳥の会のビデオを見せていただきまして。とてもいい具合にできていて感心いたしました。(生名・村上)

祝復刊! ゆげがこの間出てこないほど冷えていたんですね。弓削島には湯気が必要なんです。それは、誰にでもできるというものではないんです。(宮城県・本田)

とうとう「弓削通信」にフェニックスが翔んだね。嬉しいことだ。私も楽しみが広がってきた。人間の感覚とか感情はなかなか変化しない。粘ってがんばってください。(松山・荒井)

「フェニックス」とある通信をいただき、ありがとうございます。興味深く読ませていただきました。特に因島自由大学、参加してみたいものです。わたしがフアンの青木さんが、また執筆なされていて、うれしです。(東京・小川)

復刊弓削通信 2010.4.15 (通巻128)をありがとうございます。復刊おめでとうございます。前へ進め! これこそ我々中高年の志、そして行動パターンだと思えます。向後の弓削の通信を期待しています。(大分県・菅井)

弓削通信を復活なさいまして嬉しく思います。又楽しみに読ませていただきます。腰を痛めて人中に出ることも少なくなりましたので人様のお話しを聞く殊も又無くなりました。毎月お待ちしております。(生名・村上)

きょうち(2)

青木喜代子

物忘れ、覚えられない、そして思い出せない。これも大オバになった証なのか? 女優の名が思い出せない。「あの映画に出てた人」「最近は何のCMにも出てくれない」「なんの?」「えーと」

横で聞いていた友人の息子が「お婆ちゃん、話にならないね!」こんなことなかった少し前までは。春の長雨のおかげかイノシシが飽きたのか今年は何も豊作らしい。雨後の筍と一緒にしたら筍にもうしわけないけど、このところの新党結成の多さには驚く。「たちあがれ日本」じゃなくて、少し立ち止まって、よく見て考えて欲しいのね。リーマンショックでカネの使い道を考えるかど期待した私が馬鹿で誰に聞いてもわからない。

七色のバツシ



でわかる。グッドアイデア! なんて馬鹿げたことを考えながら風呂に入っていたら、突然「鈴木京香!」喉元まで出かけていたあの女優の名前がポンと出てきた。で、鈴木京香がどうした? 何で思い出す必要があったの? さあ...こればかりは誰に聞いてもわからない。

「因島自由大学」

6月5日(土) 午後2時~4時 芸予文化情報センター 学費二千円・「いのちひきとめたい」講師・浅野泰蔵先生



●繰り返される議会改革論

大阪府知事が地方分権の実をあげるには議会改革が必要とさげ、民主党国会議員の職をなげうって名古屋市長になった河村たかし氏が、理事者(市長)側から議会改革を断行しようとしている事態には共通しているものがある。議会が果たすべき用を成していないという認識だ。

名古屋市では「名ばかり議会」といわれる現状が市長の「地域委員会」構想を産み、議会議員の抵抗を受けている。

この改革案に対する議員の抵抗一つ見ても全国共通現象にちかい。議会改革など議員に預けては決してできっこないことがすけて見える。

●議員職は利権か

国会も選挙制度改革、議員定数削減改革案が出ては引っ込み出ては引っ込みで、まるで合併後の我が町議会の有様をみせつけられているかのようだ。

議会が何のためにあるのかを知らず役目が果たせていない議員の群れ。そう、議員というポスト自体が立派な利権になっているのだから。

ご承知のように我が町でも以下のような事態がある。議員として議決にも出席出来ない病気になる一年がくる議員がいる。参院選を機に補選でポストを後進のために空ける気もない。

それを横目に自浄力、向上力

ハコモノ事業で過疎化が止まるか チェックと提案で議会は責務を果たせ

「名ばかり議会」 になっては いないか？

を発揮出来ない議会。ともに町民のために働く意志は皆無とみえる。

なぜそんなことになるのか。だれもが答えをわけていない。なにを変えようとも変わろうとしない。

選挙に通ることが議員としての目的化している現状は、そのことで「名ばかり議会」への道を歩むこととなるのだ。

●ちょっと見回しても

我が町の近々の政策をちょっと見回しても議会の機能不全が明らかだ。長引く不況に端を発した政府の緊急雇用対策、緊急経済対策。国の失政を糊塗するための降ってわいたような補助金等を活用しての町のインフラ整備が、交通体系の見直しとして3セク(芸予汽船)、これから創る3セク(生名フェリーの後身)に、それぞれ快速船を一隻ずつ新造し貸与するとか、岩城役場庁舎(支所)の新築とか、弓削港待合所の新築とか。それも補助金に大幅な上乘せした予



【写真説明】何十年ぶりかで所有者の尽力で弓削石山登山道が通れるようになった。弓削大橋から石山からの眺めです。なお登山はしっかりした足回り。頂上付近では危険箇所もあるので用心！



算で執行される。その一方で移住しようと思う者が、いや現に住んでいる者すらが一番不安に感じる医療体制の整備はほとんど手つかずのまま。

町の定住促進策が遅々として成果があがらない中、首をかしげたくなる箱物事業が何の抵抗もなく議会を通過する。

●さび付いている宝刀

定住促進というかけ声も、この町に住めばいいぞ、ということが発信出来なければ空しく響くのみだ。それもこれも利権に

しがみつくしか能がないらしい議員を選び続けてきた帰結ではないのか。

議会が、議員がホントが一番大事なのだから。

選挙という有権者の伝家の宝刀、錆びさせ刃こぼれさせてはあまりにもったいない。

みなさん、そうは思いませんか。

(平山和昭)

(上島町議会 6月定例議会は6月17日(木)午前8時40分開始です。)

お知らせあれこれ

■上島町自治研究会(自治研)

町の活力維持には住民自治が不可欠です。任意団体「自治研」では毎月世話人によるテーマ持ちまわりで住民自治につながる語り合いと実践を目指します。参加者による事前の話題提供も受け入れます。

- ・毎月第1日曜日、午後1時半より4時頃まで。
- ・於・佐島栗手集会所(都合で会場変更もあり)
- ・趣旨に関心のある方は自由にご来場ください。
- 7月は「岩城放課後クラブ」について
- 8月は「町ホームページ」について
- 9月は「大出俊幸氏によるミニ講演会」を予定。
- ・問い合わせ・弓削通信(平山)もしくは濱田(374・0807)
- 宮脇(375・3131)の3世話人まで。

■ビデオサークル Trym(トライム)

町CATV活性化についての町民集会での話し合いの中から開始した活動です。CATV加入者増への寄与、趣味の錬磨および町民間交流をめざします。CATV局による技術指導も受けられます。カメラお持ちの方の参加を募ります。(ボランティア)

■町内催し物お気に入り

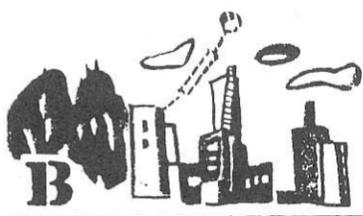
6月1日から月末まで弓削「せとうち交流館」で開催中「宮本常一がみた芸予の海とその暮らし」展。

「らっしやいませー」
 カウンターに近づくと何人も
 の店員に声を掛けられた。いや
 正確には私の顔を見て声をか
 けたのはひとり、後の声の主
 は背中をむけて他の客のサー
 ビスをしている。違うだろー。
 マニュアルか何か知らんが、
 声を出しやいって事にやな
 らんだろー。心がこもつたら
 ん！
 大オバの怒りのモードにスイ
 ッチが入る。横で夫は「いちい
 ち言わんでも」と笑っている。
 外出して、コーヒーでもと喫
 茶店を探すが、無い。昔のよう
 な喫茶店が見あたらん。すべて
 禁煙席で、愛煙家の夫も笑い事
 ではなくなる。
 四十年前も前、私が高校生だっ
 たあの頃、百円玉にぎりしめて
 制服着て喫茶店に寄っていた。
 深呼吸して重い木のドアを押
 す。
 「いらっしやい」と カウンタ

青木喜代子

「空気読めない」
 マホガニーかなんか高そうな
 ラックからLP盤のレコード
 を取り出して、そつとプレーヤ
 ーの針を置き、音が流れるま
 での時間がたまらなかつた。少
 だけ大人になれた気がした。
 今はほとんど有線で賑やかす
 ぎて、追いたくられるようにコ
 ーヒーを流し込む。
 少し前のこと。差し入れにと
 ハンバーガーを二十個注文し
 た。カウンター嬢が笑顔で問う
 た。
 「かしこまりました。こちらで
 お召し上がりでしょうか？」
 「はあ・・・？」
 「なんかねえ・・・そこまで空
 気よめないのかしらねえ。」





こどもの日に思うこと



人間として生きることに第一優先に 岡八代美

こどもの日に改めて中都職員の子どもの数を数えていた。中都は結婚ラッシュである。私は元来人間は結婚したければすればいいし、したくなければそのまま生きればいいのかという考えなので、特に女性が結婚のために倹約して結婚後の生活にすべての夢を託すような考え方をするのを好まなかった。結婚は、相手が好きですもの、一人より二人で暮らしているほうが経済的にも楽だと思っただが、男性が女性を養う事をよしとしている人たちと私とは話が合わないだろう。

好きな者同士が一緒になってどちらかが働けなくなった時は、働ける者が働いてその収入で暮らせばいい。こう言えるのは医療費や教育費が無料で、生活の大半が安心していられる社会でなければならないのだろうか。

私が子ども手当万歳と言ってる間に、NHK テレビで来年は半額になるなどと言っていた。NHKは見ない私だが連休中、民放があまりに馬鹿騒ぎをするのでNHK にしておいたのだが民放と比べて何とおとなしい事、そして真面目くさって偏った意見が正論かのよ

うな言い方で放映している。

基地の問題でも、アメリカに対し正々堂々と言える覚悟があるのなら本州の人がそれを言おうよ。沖縄から出て行ってもらうためにどこまで犠牲を払えるのか、各々自分の出し分を覚悟しておこう。生活をどこまで落とせるのか、落とさねばならないのか。

孫子(まごこ)に借金を残すのではなくとよく言うけど、おおざっぱな言い方だが日本人の三分の一の人は孫子に借金を残すような暮らしはしていない。私はぜいたくをしている人がそういう言い方で人を脅かしていると思っている。少なくとも中都の職員の子どもは今のところ必要最低限の手当はもらっているが、その保障のために日本の借金が増えるとは考えたくない。

一番早いのは金持ちの老人がたくさんいるのだから老人の死後、財産の半分は国(他の老人)に出し、残り半分を親族がとるようにすればいい。社会保障が孫子の借金の元になる式の言い方をしているが、人間の生きる元のことをそういう表現でされたくない。生きることを第一優先にして医療費無料、学費無料、子ども手当(障害者手当)を出す事にして、後は日本で稼げることに力をいれよう。それが音楽でも美術でも科学でも。スウェーデンやデンマークのように・・・。

●失政のツケは有権者に
復活号で紹介した渋谷区の
社会福祉法人「中都」の理事長、
岡八代美さんからのおたよりを
いただいた。同封されていた機
関誌に掲載されている八代美

さんの一文を転載し紹介させて
いただく。
なぜ我らのまじめな日常生活の結果が政府から孫子の代
に負担を残すと言われるねばな
らないのか。政治とは何だ?

①われこそがブランド品に

安藤朋生 (ともき) 茨城県

陸続きではあるが、過疎が進む我が町、茨城県桜川市真壁町も悩み多き地域である。真壁町と言えば誰もが石材と答えるほど、ほとんどが石材業を営み、でなければ農家。それ以外は何もないとっていい土地柄。パラパラ点在する工業団地もあるにはあるものの、これまた人をあまり取らない。不景気のお陰である。

30~40分程でつくば市にも行けるが、やれ大卒だ、やれ経歴だ、やれ特殊技能はと、やれやれ尽くし。早いなし大卒か専門卒、あるいは資格のない者には職がない。安藤もそのひとりではあるが地元で職を得るのは容易ではない。

田舎独特の風習もあつたりで女手ひとつで娘を育てるにもきつい。

幸いというか、ある研究所に勤めていたことのある安藤。まだ派遣の仕事があり工場の研究開発チームに派遣されることになった。そこでも一番に聞かれたのが、どこの大学?である。もしくは何を専攻していたのか?。

派遣=大卒という図式。派遣の内容とてピンからキリまでであるのに、「派遣だから出来る人」という固定観念がいまだにあるということ垣間見た一言だった。

大卒ばかり採用し続ける工場の開発チームは、いわば大卒というブランド志向なだけにみえる。なぜこの開発に一流大卒の頭脳が欲しいの

島に住みたい



笠間陶炎祭にてファンキーな紳士と2ショット
ご機嫌だぜー☆と紳士(笑) 筆者向かって右

か、そのあたりは全く見えない。

こういう旧態依然の会社や工場はまだたくさん存在しているようで、かくいう自分の娘にも、大卒という肩書きがなければしたいことを諦めざるを得ないのかと、日々不安に思う。まさに日本人の学歴志向は計り知れないところがある。

古い蔵を多く残すのが真壁町。一昨年3町村が合併し桜川市となった。

真壁の外周は石で栄えたが、町中は作り酒屋など蔵を持つ旧家が多い。そこに眠るひな人形をPRしたことで見事観光客を獲得した。いまでは蔵の町の雛祭りとして、年々観光客動員数は上がってきている。

古い蔵に古い雛人形。蔵に陽が射す一方で外周の石屋は年々縮小し、家業をたたむ者、家業を継ぐには不安があり町を離れる者、石屋と平行し田畑を守り農業に集中しようという者、悲喜交々とともに日陰になりつつある。

田畑がある石屋はまだ良い。安藤家のように、石しかない意志にかじりついて細々とやるしかない石屋もある。

石屋の苦境にしても中国やインドからの輸入品が増えたのも大きな原因で、国産の十分の一の値段で字彫りまで出来るのだから商売の上手下手以前の問題なのである。生きることは単純なほうがいいと思う反面、こうして田畑を持たない者には逃げ場はない。

こんな状況は、たぶん全国あちこち、あるいは、安藤の知人の住む離島も似たようなものなのかもしれない。

この町も離島も、多分少しのアイデアで復興できるかもしれないが、ただし一人では無理だろう。少なからぬ「これじゃダメだ」という思いを持った人達がいて、思いを形にしていく強さを育まねば、と思う。

わが町のブランドが石と蔵であるなら、島は海と自然豊かに暮らして来た人達がブランドではないだろうか。どこでも買えるものではないもの。ひとりひとりがブランド品という誇り。

実は、安藤は島に住みたいと思っている。そのことはまた次回に。(つづく)

海の季節に先駆けて 「瀬戸内の楽園」上梓

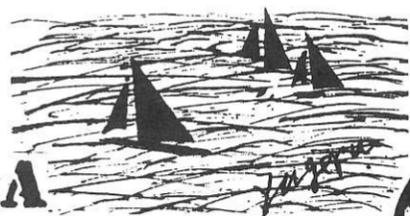


●元魚島村長、佐伯真登さんの著作が「螢翔手づくり文庫・第九十二集」として上梓された。

●上弓削にあるNPO法人「ふくふくの会」発行の「ふくふくレポート」は、隔月発行ながらたくさん読者の心をとらえていると思う。利用者や職員の顔出しも

せるかに心を砕かれた氏の、古里への思いはリタイアしても洩れることはない。高めまるで家族の日常を見られるように公開されるのはすばらしい。高齢者介護の現場が、こうして明るく町民の目に触れることで「親はふくふくさんでお世話になってます」とさっぱりと言える雰囲気定着した。





いつまで続く殿様商売 自治体職員は「経営」意識を

離島振興はされたが

6月号は議会の現状に光をあててみた。今号は理事者にもスポットライトを当てなくては不公平だと言われる。

いま町では色々な箱物事業が進行していることは先月紹介した。その中には利潤を上げることが目的としないもの、利潤を上げねば存在意義を喪い、町の財政を圧迫するだけの効果しかないものもある。

同じ10億円規模の事業のうち、特養海光園の立て替えは前者、弓削ロッジ建て替えは後者と言えるだろう。

6月末まで「せとうち交流館」で展示された宮本常一は、自らの研究活動で眼にした多くの離島の後進性を打破するため「離島振興法」を誕生させることに心血を注いだ。後年「振興法」ができてかえって島が悪くなったと慨嘆した旨が魚島の佐伯眞登氏の文集に紹介されている。(A面下段記事参照)

「離島振興法」は要するに国家予算の離島への配分の法的根拠として機能してきたわけだが、都市部と田舎部の格差を公共事業で埋めようとするあまり「環境」に関してはあまり注力されなかったのではない。つまりハード面はどんどんよくなったがソフト面が追いついていかなかった。ここで言うところの環境とは、狭く自然環境のみならず、地方の独立覇気の気概を養う、つまり自治意識の高まりを支えていく仕組みとでも言い換えられよう。

まず住民が気概を持とう

旧政権時代は中央への陳情による予算獲得手法などを通じ、結局は地域住民の役所や議員への依存心を温存あるいは高め、それは政党にとっての集票手段に置き換えられるという悪循環をくりかえし現在に至っている。

自治意識は依存意識と対極にある。地

はなから決まっているのだろう。

まずモノありき。快速船を三セクに無償貸与するのと全く同じ図式だ。

部下を使いこなせない指揮官？

6月議会で、ある議員が施設の愛称などについてただすと担当は「これから公募する」など民間の経営者が聞いたら目をむくような呑気さ。新台入れ替えを事



方分権を声高に唱えながら財源はいつこうに地方へ移譲しない旧、現政権の姿勢は、最も地方自治から遠いものだ。

しかし6月議会を振り返ってみると、仮に財源を委譲されたとして、では末端の自治体はそれを使って立派に自治体経営がやれるのだろうか？と疑念がわく。読者諸賢においてはいかがだろうか？

うるせえ！とも言われぬ

先月号では少少きつい議会批判をしたつもりだが、理事者に向けた批判でもあった。でも何を書かれようと言われようと、腹も立たずへのカッパなら、そういう大物くちなわに処する術は、「巻かれる」ことしかないのだろうか。

いま工事が進んでいる離島体験交流施設も(要は弓削ロッジの建て替え)完成は来春。およそ10億円もの施設を新築し走らせようと思うならそれが出来る経営者がいなければなるまい。今の運転手間で間に合うのか。経営課題をどうクリアするのか。議会での十分な説明も議論もあつたように覚えぬ。管理委託者も、

前にPRし、グランドオープン時はさらに新規の客を呼び込み将来に繋げる。パチンコ屋でもそうする。

職員がそうならトップも同じ。追求されれば部下に指図しているがやらない。3年もたてば移動だからという意識か？などとのたまう。言われる職員も言う町長も双不信。民間の株主総会で社長がそんなことをいえばどうなるだろう？

首長、職員、議会議員、互いに不信感を持ちながらも仲良くぬるま湯に、か。

宮本常一に「振興法」で島がだめになったと言わしめたのもうなずける。

(平山和昭)



「彷徨のまなざし」長浜功著
宮本常一との交流と魅力

今回の書評人 佐伯 眞登
(愛媛県越智郡魚島村村長)

この7月上梓された魚島の佐伯眞登さんの文集第3弾「魚島恋唄」に、平成7年刊行のジ・アース誌に掲載された書評が収録されている。今なお新鮮な記事なので紹介する。

島と本土との格差をなくしようと、昭和二十八年につくられた離島振興法という法律がある。
おかげで、離島の生活・生産の基盤整備が強力に進められ、どの島も随分よくなってきた。
しかし、この法律の生みの親である宮本先生は、後年、「離島振興法ができて、かえって島は悪くなった」と歎いた。
「たしかに島の港や道路や諸施設など、見てくれはよくなったが、それを生かして島をよくしようという、自助努力の精神が衰退し行政依存の風潮を招いているのではないか」という鋭い警告である。
だが、これは離島だけの問題ではない。「何でも行政へ」という甘えの構造が、いま日本全国に蔓延しているような気がする。
自分たちの力で、地域をよくしようという努力をしないで、地域がよくなる訳がない。他力本願で、島が発展する筈がない。
宮本先生との初めての出会いは、昭和三十四年の晩秋のことであった。全国離島青年会議に出席した私は、「島づくりは、島民みずからの手で」と、自主振興を呼びかけられた先生の講演に、鮮烈な感動を覚えた。
以来、何度か青年会議に出席しては、先生から、いろいろと島づくりについて、お教えを頂くのが、当時の私にとって最大の楽しみとなった。
この青年会議での先生の教え子たちの、島づくりへの情熱の凝結が、のちの愛媛県離島青年協議会や、全国離島振興推進連絡委員会の結成と活動につながったのである。
もう十数年も昔のことであるが、松山商大で講演を終えた先生が「佐伯さんとの約束がありましたので」と、ひよっこり魚島にお越し頂いたときには、そのご熱意と記憶力に、驚きそして感動した。
また先生のお供をして、島のお年寄りから「島のくらし今昔」について取材したこともある。
「後の者に何かを語り伝えようとする人には、後続の者に寄せる信頼と愛情があり、自信がある。その自信の中には、島がよくならなければ、自分もよくならないという考えがあり、後から来る人のために、必ず役立つ知識がある。佐伯さん、昔の人の話は、よく聞くものですよ。」
取材の後での先生のお言葉であるが、先生の信念と温かいお人柄がよくわかれる。
先生は、柳田国男によって発見され、波沢敏三に育てられて、民俗調査の旅を続けることになったが、島に寄せる深い愛情と情熱、田夫然とした温顔に秘められた人間の魅力の原点は、どこにあるのだろうか。
その謎解きの鍵を発見した。長浜功の「彷徨のまなざし」・宮本常一の「旅と学問」である。
あとがきにもあるとおり、「旅と学問」よりも「旅と人間」に焦点が当てられ、先生のお人柄や思想、民衆とともに歩んだ生涯を、克明にたどった宮本常一の初の研究書である。
だいたい、この手の本は理屈っぽく難解なものが多いが、非常に読み易く、随所に文献も紹介されており、宮本学の入門書として、また地域おこしのテキストとして好適である。是非一読をおすすめしたい。



投稿

映画「祝の島」巡回上映をみて

KOKO

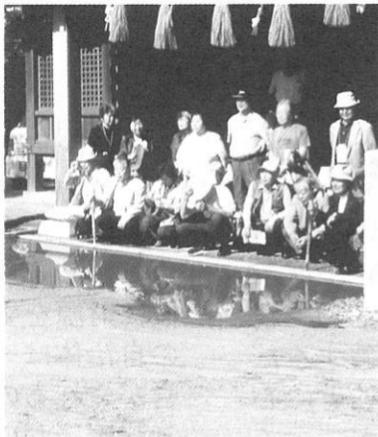
六月初旬小さなピラに心を動かされ「はぶポート」へ映画を見に行きました。

山口県上関町祝島。瀬戸内海にある島で、上関原発建設予定地の沖合にあつて二十八年間反対運動を続けている祝島の人々の日常生活を撮った映画です。一本釣り漁師や、祖父から受け継いだ棚田を守るお年寄り、児童三人の小学校の入学式や運動会、お祭り。その一方で二十八年間、週一回、島内での上関原発反対のデモ行進を続けている。そして中国電力の工事を阻止する活動もある。

効率と利益を追い求める社会が生み出した原発。その原発事業を推進する中国電力の電力を、私達も利用している。ドキュメンタリー映画「祝の島」。原発を巡る人の命の姿を撮った額縁あや監督(三三三)は、上映後の話の中で、その映画の中で「海と山さえあれば生きていける。だからわしらの代では海は売れん」と言う祝島の人々の生き方、暮らしを撮影することで心を動かされたと言った。

映画の中の島民の言葉で忘れられないものがたくさんありました。そのひとつに「原発賛成の人達はわし達みたいに命をかけているか。賛成派と反対派で島の人々がわかれろ」というのは「つらい」というものがある。いつの時代にもこうした企業誘致は、静かに平和に暮らしたい人々を引き裂いていく。私は日々前向きに逞しく肩

を寄せ合つて助け合つている島民の方々に声援を送りたいと思います。感動もたくさんいただきました。またいろんな事を考えさせられました。上映にたずさわった方達にも感謝でいっぱいです。



「道鏡を守る会」歴史探訪隊弓削島に来たる

平成10年6月15日から16日にかけて「道鏡を守る会」の会員が弓削島に立ち寄りしました。(総勢20名)弓削口ロッジで1泊。弓削の会員との交流ならびに道鏡関連の史跡を探訪しました。

(写真は弓削神社での記念撮影風景)

② 寄ってらっしゃい 見てらっしゃい

茨城県 安藤朋生



梅雨、到来ですね。安藤の住む茨城県真壁町も梅雨入りはしたものの、まだまだ朝夕寒く、フカフカのお布団がまだ手放せません。この原稿を書いている時はまだ6月も始めの頃。こうしてパソコンに向かってる今も(早朝5時)パーカーのフードをすっぽり被り、ほっかぶり姿での作業。人には見られたくない姿であります。

さて、最近の中国はお金持ち、富裕層と呼ばれる人達に人気の観光スポットに北海道が上げられているのをご存知でしょうか?

道東などを舞台とした中国の正月映画「非誠勿擾」(フェイチェンウーラオ)

が中国全土で大ヒットし、中国人民を魅了しました。そのクライマックスに登場するのが北海道は阿寒湖や能取岬で、映像の美しさから北海道ブームを巻き起こし、ロケ地巡りツアーを企画すればあつという間に満員御礼。幾らでも出すから企画しろ!というから鼻息ムンムンの集客率抜群の映画なのです。

一大センセーションを巻き起こしたこの映画、厳しい環境にあるオホーツク圏観光地に入込減少に歯止めがかかるのでは?と期待が高まっているような。

ちらりと見ましたが確かに美しい。映画で使われた土地はもちろん酒場や温泉宿、ただの雪深い小道にいたるまで観光客にとってはどの場所も”あの映画”の1シーンで、寒いのも主人公に成り切る大切な要素だということから、そん

なにも魅了されてしまう映画って・・・日本で言う冬ソナ?!。この映画も社会現象になりましたものね。映画で主人公達が使った温泉宿の一室は何ヶ月も予約待ちだとか。

ロケ地巡りだけでなく、そこはちゃんと相乗効果も考えられたプランを提供し、タラバガニ食べ放題とか、伝統工芸品店観光とか。まあ財布の紐の締まり具合と云うたら何処の国の方も一緒のようですが、それでも来ないよりは全然いい。そうそう来ないよりいいんです!来るのと来ないのとじゃ大違い!

その土地を踏まないと分からないことが沢山ある。映画を見て北海道を訪れた人達。その人達の目に映画の1シーンとしてだけで

はない日本の風景や空気感を是非体感して、そして又来て欲しい。きっかけはなんであれこの

日本に興味を持ってくれることが最大のポイントだと思うんです。

旅というのは中々行けるようで難しい。けれど思い切って行った初めての地という印象深く、その想いは長く続く。柱に傷をつけたわくわくとしたあの日の感覚を何度も思い出すような、そんな気持ちにさせるのが島なのではないでしょうか。

寒さ、あるいは暑さに厳しかろうと不便だろうと、荒れた海や、波の音のしない静か過ぎる風に、季節の存在を見よとばかり萌える山。何もないからこそ分かる存在の多くが島にはある。だから魅了され住み着く人もいる。何もないんじゃない。何もいらぬ。両手を塞ぐ荷物で素晴らしい景色を見逃したくない。

やっぱり、島は素敵♪



弓削通信で何度も話題になった富良野塾が二十五年度の歴史にピリオドを打った。「四月の閉塾式にいらして下さい」と招待を受けたが「雪も溶け花はまだだし」と可愛げのない断り方をした。雪と言えは六年前、倉本氏の生前葬をやるから来いとこの招待状を片手におもしろがつて富良野まで行った。夢のような一夜が明け、外を見るとオーマイガッ! いわゆる爆弾低気圧で空

青木喜代子

港に足止め。白い恋人たちのダンボールを敷いて俄ホームレス。チケットの追加料金が発生しないかわかると「こんな経験、お金出しても出来ん。いい土産話ができた!」と同行の友人と

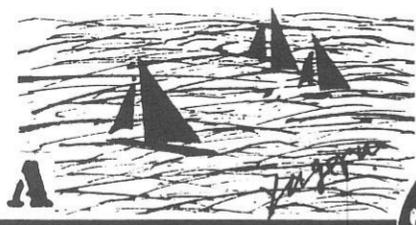


悪夢を楽しんだ。この件以来、よそのヨメさんが、やれどこまでライブを、芝居を観に行つたと聞いてもどうこう言う権利はワタクシにはございません。

少し前、話題の映画を観にいった。長時間待たされた揚句、大音量に加えめまぐるしい場面展開で、大オバはすっかり疲れってしまった。ああ、娯楽には人それぞれの好みがあるのだと痛感した。そして気がついた。今まで富良野塾公演の度に「だまされたと思って観て。絶対感動するから!」と拝み倒し何人かの人をだまし拉致監禁していたことか。いま紙面をおかりして心よりおわび申し上げます。最後に、倉本氏との約束ではもう一度因島に来てくれるはず。もし町でポスターを見かけたら青木には近づかないように。くれぐれも。

★7月号は奇しくも「島」の話題ばかりになってしまった。意図したわけではないが投稿も島に関するものばかり。近年瀬戸内海が見直されているが、そこに住む人々の真の願いが反映されるのであれば大歓迎だ。(編集子)

お知らせ
8,9月号は夏休み
休刊です



地区総出の松原清掃奉仕作業

迷走し短命に終わったが鳩山政権時「新しい公共」という考え方がうち出された。公共サービスを市民自身や NPO が主体となり提供する社会を言うらしいが、この「新しい公共」という考え方を定着させるには、住民の意識が大きく変わる必要があることは想像に難くない。しかし我々はあまり意識せずすでにそれを実践してきた。

いろいろな「新しい公共」

●イエス ウィキャン!

昔からどこにでもあった道普請とか、盆正月に際しての参道、あるいは地区内清掃など、共同体の中で必要に応じて講じられてきた住民による自主的実践がそれである。政府がかけ声せずとも共同体を構成している地域なら自然に生まれる行動だ。むしろ政府がそれを言うと、財政出動の抑制を狙うきな臭いがある。がそこまでひがむと可愛げが無くなるので止すが、ともあれ我々にはすでにそれを為し得る力が備わっているということだ。

●減びてしまえば町も野山

裕福な都会人である元総理のイメージに、末端自治体のそのまた末端の地区が、貧しいが故に大昔から実践してきたことがモデルとしてあったかどうかは知るよしもないが、バブル経済時代あれもこれもお上におんぶだっこに慣れてしまった今の我々ゆえ、改めてそれらの行為に「公共」という額縁をかけてみると、実は周りの景色が少々違って見えはしないだろうか。

●必死さが足りない

幾度も「弓削通信」で述べてきたことの一つに、我が町をこれからもかけがえのないものと

して維持するには、何を置いても人口の減少を食い止めねばならない。誰もがそれをわかっている。

わかっているながら真剣になりふり構わず取り組まないのなら、行政のみならず住民一般も既に未来を投げているということに他ならない。未来に期待出来ないような地域社会に魅力が生まれるはずもない。それは我々の取るべき姿勢では断じてない。

●創意と工夫、果敢な実践

こと町づくり、地域活性化には、地域住民の「公共の視点」に立った目的意識を持った活動が改めて必要になっている。

何をもち「公共」とするかで様々な考え方が出てくるには違いないが、まずは身近で、やればよいと思える事に、関係住民が自主的に行動を起こす。一から十まで行政に期待するのではなく、少なくとも「こうやってほしい」「こうやろう」という事ぐらいは地域が決めた。そして個々の住民は、自分の利が公共の利の中で達成できる在り

方を、自分の頭で考えてみよう。その上で行政もそれを支援する為の知恵を本気で貸そう。

●すでに手はある

我が町にはすでに地域住民の自主性に期待した補助限度額10万円から150万円の「ふるさとづくり交付金制度」がある。その活用はまだ不十分だ。役場の担当部署は既に活用された事例をも含めさらに周知に努めることが住民への支援だと改めて自覚すべきだ。小さな事でも積み重なれば大きな事になる。

●色々な新しい公共

去る8月に発足した「弓削佐島防災士、防災リーダー連絡協議会」あるいは、まだ十分な体制整備には至ってはいないが「上島町区長会連合」など、まさに「新しい公共」の活動と呼ぶにふさわしい。

合併したそれぞれの島の感性に応じた「新しい公共」観が、互いに刺激しあって動いていかなければ、町の未来は決して暗くはないと思えるのだからだろうか。(平山和昭)



「新しい交流」

町の一体化へ向けて一歩を

十月は秋祭りの月である。祭りは確かに宗教行事だがそれを脇に置いて、子ども達にはふるさととの強い絆。いつまでも続いて欲しいと願うのは筆者だけではない。ところどころの祭りの催行に異変というか、必然の事態が起きている。子どもの数が年々減り「だんじり」の乗り子や「道中奴」の人員が確保出来なくなっている。当面は祭りの日をずらしたり、島内他地区からの応援を求めて実施しているところもあるが先行きは悲観的だ。そこで次のように考えてみた

らうだろうか。 中学校は一昨年から弓削中、生名中が統合され、生名の生徒は弓削に通っている。同じ中学なので生名の生徒にも参加を依頼したらどうだろう。今年も間に合わないが来年は生名橋も通行可能になり練習の送り迎えもできる。もちろん弓削の子が生名に応援に行くような事態もあるだろう。 そういった新しい交流が実行されれば、子ども達にも大人達にもまた新しい古里感、一体感が生まれるにちがいない。



青木喜代子

今年の夏の暑さには少し危機感を覚えた方も多いのでは。真夏日の続く九月中旬、アフリカのケニアからパワフルなお客様がやって来た。ナイロビ最大のスラム街キベラで孤児、元ストリートチルドレンの駆け込み寺「マゴソ・スクール」を運営し、スラム住民の生活上の為にプロジェクト、マサイ族と行うエコ・ツアー、フェアトレード促進等、広く広く活動している早川千晶さん。TV、報道でご存じの方も多いと思う。

スライドを使つての講演の間は、ずつと笑顔。ゴミ置場のトラックの下で寝起きする孤児の話をするときも、夫と死別して五人の子どもがいるのに、何人も孤児を狭い部屋に住ませ、路上で揚げパンを売ってみんなを養っているおばさん。 葉には説得力がある。 そう、新鮮な野菜と、少しの魚と、素晴らしい友人がいれば貧乏なんてこわくないぞ! 還暦を目前に、以前にもまして、人の輪、和のありがたさを強く思う。 ね、みんな仲良く生きようよ。 誰か私に「ハランベエ」...



町内情報

★防災連絡協議会発足

去る7月28日付けで「弓削・佐島地区防災士・防災リーダー連絡協議会」(略称:防災連絡協議会)が発足しました。この協議会の目的は、有事における自主防災活動の一翼を担い、行政(役場、消防、警察)および自治会と連携し、災害時の減災に寄与することです。 上島町は県内有数の防災士を擁し、本年8月に実施された養成を含め約200名。未組織のためその活動の有効性をさらに高めるためにも組織化が必要と考え、行政職員を除いた弓削、佐島地区の有資格者が自主的に組織化を果たしたものです。、将来は全町に拡大をめざします。



国民宿舎「弓削ロッジ」が離島体験交流施設（愛称未定）として生まれ変わるべく建築工事が進行している。

長引く不景気による地方経済の緊急経済振興策として打ち出された政府施策の一環をいち早く長年の懸案であったロッジの老朽化対策に結びつけた町長の手腕が先見の明たり得るかどうかは、実は建物の完成よりもそれから先の運営にかかるであろうことはフェニックス7月号に少し書いた。

普通に考えればこの装置をペイさせることは至難だと思えるがあえて取り組む勇気は尊い。それならば理事者は相応の腹のくくり方をせねばなるまい。

■このゆるさが理解しづらい

全国数あるリゾート宿泊施設が苦戦する中、後発の、しかも経験値の乏しい施設をどう軌道に乗せるか。少しばかりの企業経営経験や従業員の研修、ノウハウのいいところ取りでコトが成るはずがない。ところがである。当面、運営に関しては指定管理者に今までのロッジ管理者が当てられることになったと聞く。指定管理者契約がまだ残っているからだというような理由説明がなされたらしいが、このどことなくゆるい感じに、矢張り不安がわいてくるのだ。

成功させよう 十億円かける施設を

町民一丸となつて
（弓削ロッジ改築）
離島体験交流施設を
もり立て



■まず経営には専門家を

装置の規模が大きくなれば扱う者の能力もさらに大きいものが求められる。船のクラスが変われば海技免許も変わるのとおなじことだ。餅は餅屋ともいう。理事者もこれから引き継ぐ指定管理者も、ではこの施設の運営に関して、その計画と見通しを公開する責任と義務がある。議会に説明したなどとお茶を濁してはいけない。どんな情報で

の来ない無人島に男23人と、たったひとりの女。ココロもカラダも解放されるサバイバル・エンタテインメント』。

この見出しだけで大凡の想像が出来てしまう映画とは言えまいか???。でも単に無人島に23対1だけの話がある訳がない！と思い、ネット検索。どんなに陸の孤島であってもインターネットは世界中の孤島を繋ぐのである。

で、ストーリーは大体こうだ。

結婚20周年を記念して夫婦2人きりのクルー

ザー旅行に出掛けるが、途中で嵐にあい太平洋に浮かぶ無人島に漂着する。東京では夫に頼りきりの専業主婦だった清子だが意外にもサバイバル能力を発揮し、夫の隆は島の生活に馴染めず日に日に衰弱していく。ある日16人の若いフリーターの男達が漂着。さらには密航に失敗した中国人6人も加わり、若い

あれ議会から町民に経緯について説明されたことはかつて無い。

■顧客満足度をあげる

弓削総合庁舎の外観はご承知の通り船形だ。新しい体験交流施設もいわば一隻の船だ。よってこの船は、町の未来でもあり、希望でもある。生み出す母体としての町民の立場からすれば、

今までのいきさつに拘泥せず斬新な思考形態を持ち込んで欲しい。それがまた町が、住民が変わっていきける大きなきっかけになるはずだからだ。

また納税者であり船を生み出す母体でもある町民は、施設の努力を冷ややかに眺めるのではなく、新しい船出に一体感をもって育むことに努めるのが最も大切な期待されるべき行動だと考える。ほら、子どもの将来は5才までの家庭環境に左右されるというではないか。

■視点を移せば新しい公共

「我が町を訪れる顧客の満足度を町民全員で上げる」これもひとつの「新しい公共」のモデルとは言えないだろうか。

（平山和昭）

◀10月1日現在の立て替え工事風景

議会見聞記①（フェニックス版）

（平山和昭）

九月二七日開催された上島町定例議会は都合により傍聴できなかったのでCATVの録画中継を見た。

CATVに加入すれば議会を茶の間で見ることが出来るが、加入率はその後向上したのだろうか？。町民は議員が議会ですごしているのか一段と関心が増したのだろうか。とても気になるところだ。

九月議会では残念な事態が見られた。一つは町長の問題発言。もう一つはそれに対する議員の反応。

町長の問題発言は公有地売却に関する質疑応答の中で発せられた。発言の一つは（いるるな会合での）町職員が発言は決定事項ではなく、総ては最終的に町長が決める、という主旨の発言。もう一つは（全員協議会では出さなくてもよい情報を報告しているのに）それにケチを付けるのであれば今後は出さない、という旨の発言。

前者は職員の説明や回答は無責任であるという宣言であり、後者は議員の質問とはケチを付けていることだ、ということになる。それに対して議員だけ一人として抗議の声もあげない。

男23人と女は清子だけという奇妙な共同生活が始まる。やがて隆が謎の死を遂げ、清子は島でたった一人の女性として女王の様に君臨し、少しずつ島のバランスが崩れ始め・・・と言った具合。

漂流というと青い珊瑚礁や続編と言われているブルーラグーンなども思い出

される方もいるかと思ひますし漂流教室なんかもありましたよね。どちらにせよ、何も無い無人島で極限状態に追い込まれたら人はどんな行動をとるのか？。

この東京島には元ネタが存在します。1945年から1950年にかけてマリアナ諸島のアナタハン島で起きたアナタハン事件。

女性を巡る一連の怪事件(男性も女性も日本人)が戦後、大々に報道され、日本国内でアナタ

ハンブームが巻き起こり、映画や舞台、この女性のブロマイドが売れに売れたという。

1974年、安藤の生まれた年に亡くなったこの女性は、どんな気持ちで最後を閉じたのか気になります。救助され日本に帰ってみれば逆ハーレムを生きた女性として脚光を浴びた人生に心から笑えた時間があったのか。考えるまでもないのかもしれませんが。

生きるとは食欲で、それだけで何もかも乗り越えられるエネルギーを放ち、それが原始の力。島にはそんな力が存在するのかもしれませんが。島に原種が多いのも長寿が多いのも本土にはないエネルギーが存在するからではないでしょうか？。まさに島全体がパワースポット！。こりや益々出向かにならん！。島という”天然サプリ”で脳もカラダも瑞々しく潤した〜い！

サプリメントは天然で

ともき 安藤朋生 茨城県



NHKの連続テレビ小説”てっぱん”が始まりましたね。

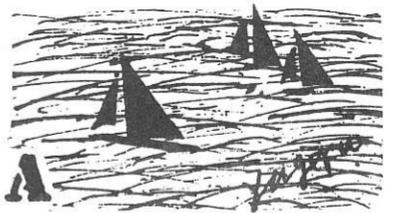
今度の舞台は尾道市。坂が多くお寺と造船の町だそうで、その景色は旅人の心をくすぐる。いつか、いつかなどと言ってる場合じゃござんせんよと、ふうてんの寅さんよろしくタ〜ッと行く気だけは満々な私です。

さて前回の島住(マズミ)では中国映画で北海道が使われたお話をさせて頂きましたが、今回の島住は日本映画の話題をピックアップさせて頂きとう存じます。

桐野夏生原作の『東京島』。もうご覧になった方、お読みになった方もいるやもしれません。この映画のCMや見出しの台詞、なかなかのインパクトを与えましたよね。

『あなたなら、どうする？助け





島で楽しく暮らしながら 頼れる故郷をつくろう

●島で暮らしたい

島暮らしをしたいという都会の若い人がある。実現すれば嬉しいことだ。筆者世代から見ればわざわざ都会から島の不便を忍ぶ生活に踏み込む魅力があるのかなと、一応は思う。

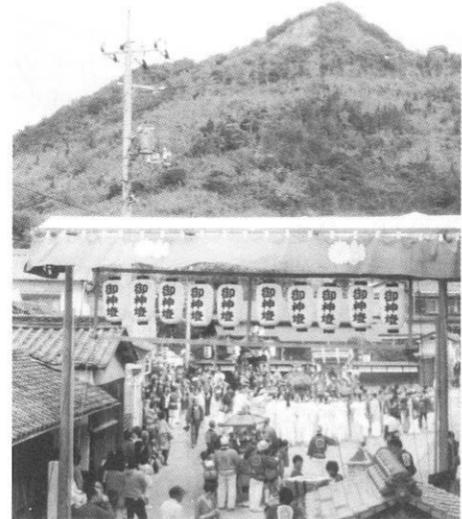
だが考えてみれば、筆者もまた若いころ故郷へ舞い戻ってきた。理由はいろいろあったが、田舎で子どもを育てるのが動機の一つだった。

子どもが生まれ、育つ環境を見てみると田舎で育てた方がいいと思え、若いから仕事は何とかなるとたかをくくっていた。育児を終え、なお都会暮らしがしたければまた出て行けばいいとも。楽天的というかノーマン天気というか、出世や地位には縁がないと決めてかかって居たからだと思う。

子供を産むからには一人で生きてゆけるように育てるのが親の責任なのを言うまでもない。ではいつまで責任を負うのか。それを趣味の野鳥観察が教えてくれる。

●自立を促す野生の知恵

野鳥には巣立ちという儀式というかステップがある。巣立ちとは鳥として生きるための世間への旅立ちである。巣立ちして間もないまだくちばしの黄色いあいだ親はせっせと餌を運ぶが、それはほんのわずかな期間だ。空を飛び、獲物を見つけ、捕



らえ、餌として消費するすべを、親鳥は短期間にやってみせながら教え、ある日突然親子の絆を解き放つ。すがる雛を見返ることもない。

すべて野生の生き物にみるこの歯切れの良さは、一見酷薄に見える最も理にかなった愛の在り方だといつも思うのである。ひるがえって我ら人間界の子育ての有様はどうなのだろう。

●時代の子は次代の子

島で暮らしたいと願う若者にどう思うか。田舎で育てたいというのがその目的の中にあるのなら大賛成。筆者に出来ることとがあれは力を絞りたいとも思う。それはかつて筆者が故郷にしてみらったことだから。わが町も高齢化の裏返しとして少子化があり、少子化は町として存続するにはとても大きなマイナス要因。できるならどういふ形であれ若い人には帰ってきて、あるいは移住してほしい。

◆島の祭りは潤滑剤。人々の絆が固くなる

とはいっても筆者が帰ってきた頃のように、そこで身過ぎ世過ぎに足りる職業が充分あるかと言え、残念ながらノーマン言わざるを得ない現実だ。しかし、時代の子には時代に応じた生計の道が必ず見いだせるのではないかと、楽天的にも思う。

●自分を見直す

島で楽しく暮らす。海や山で遊んだり、のんびり経過してゆく時間を楽しむのでもいい。それのみならず、町を元気にし、若者に島で子育てをしたいと思わせる情報を外に届けて放つ楽しさ、当然あつていいのではないかと思う。

移住し食べてゆくための方途は、移住者本人の創意と工夫、責任にあるとしても、せめて空き家の提供とか、そうした情報の共有や発信とかは、次世代に夢をつなごう。我々年のいった者の責務としてとらえ直してみよう。

渡り鳥は千里の道を遠しとせず大陸と故郷ニッポンを往来する。うまし故郷なら人間世界の我が町にもそれがおきるはずだ。(平山和昭)



BOOK「奇跡の海」

瀬戸内海周防灘は喪われたはずの生き物が居る奇跡の海だった。上関原発の建設推進に際し、建設前提で事業者が作った「環境影響評価書」に対し、素晴らしい日本の自然と生物多様性を将来に手渡すために有志が手弁当で研究した成果「もう一つの環境影響評価書」が誕生する軌跡を紹介。30年原発反対運動をしている祝島の人々に通じる。●希望者に貸し出し可能です。

秋の手仕事に物思う

ともぎ 安藤朋生 茨城県



季節はすっかり秋。物思いに耽るにも手仕事を楽しむにも良い季節となりました。

私にとってこの時期楽しみな手仕事のひとつと言えば、大量に作る栗の渋皮煮。鬼皮を剥き易くするため水に付けること半日。栗に傷をつけないよう剥くこと大鍋2つ分。ここまでで1日が終わり完成！ってまでに3日はかかります。そして家族や友人が美味しいと言ってくれるとあの手間隙が何でもなくなるのだから不思議。何と云うか、出産に似てる？これでもかという陣痛に耐え、オギャー！と聞いたその瞬間あんなに痛かったことなどポロッと忘れるって言うのでしょうか？ ちなみに安藤は出産前後の苦しい記憶が未だ消

えず、産みの苦しみに耐えられるのは食うことだけでございます。

先日もまだ紅葉も早いというのに滝見のそばの蕎麦が食べたくなり母娘弟と、雨だというに出掛けて行った。名物の美味しい物が食べられるなら行列にも参加するし、1度食べてみたいと思ったら結構な時間を待たたりたりもしちゃいます。今やインターネットでなんでもお取り寄せが可能といったら、体重計となんて友達じゃなくなるユトリっぷり。恩師に自分に厳しくなるよう求められるのもむりありません。

幸せなことに安藤には恩師が2人おります。相手はどう思っているか分かりませんが、36歳にして出会えた人生の師。恩師とよぶ以外に何と呼べるでしょう。奇跡的な出会いでもあります。そんな2人の恩師が有

う事か共に手術をすることに。

私だけが2人を知り恩師同士は知り合いではない存在。手術部分こそ違えども重大さはどっちもどっちで1人は心臓、1人は脳に近い耳の中というから気が遠くなりました。連絡を受けたのも同じ頃。入院する時期も手術の日取りも1、2週間程のズレしかなかった。

何はともあれ、手術は無事成功し今は回復に向け調整中とのこと、安心しました。

自分自身、もしものことがあったらより良い医療を受けたい。そしてそう思うのは誰もなことと思っています。しかし実際は受ける治療や望みも様々なら、術の無さに苦渋することが出て来たり、全部が叶うわけではなかったりと葛藤するんだと思います。それならば残りの時間をゆったり過ごして逝きたい。

諦めではなく1つの選択として生の限りを穏やかに過ごせたら幸せではないでしょうか。

治療を受ける者だけでなく、それを見守る者にも時としてそうあつて欲しい。そしてそこに向かう何よりも大切な事は様々な説明が不可欠なんだということではないでしょうか。

病状や手術の進め方だけでなく、看取る方・見守る方達に対するメンタル面へのサポートも大切な医療なんじゃないかと。

島に住みたいのお題から離れてしまいましたが、日本の”心の治療”はまだ高度とは言えません。だから島に移り住む人達が増えているのかもしれないね。

島は大きなホスピタルなんてCMがありましたけど、正にその通りで、ゆったりと過ごす心にストレスは生じない。医療と言う名でないが治癒力が島にはあるのかも。



♪カラスなぜ鳴くの？ 画一化と住民感情

■ひとつの町への道

合併してそれぞれ旧町村でなわれてきた施策の多くは「ひとつの町」という立脚点で画一化されてきた。そうしなければならぬもの、無理にしないでよいもの色々ある。我が町も小なりといえど四つの旧町村地区を行政区域にしている以上、当然だ。ところで各島々は何百年も独自の発展を遂げてきた。その町村が合併したのは、ひとえに中央政府のご都合主義に端を発しているのは平成の大合併劇をみても明らかだ。それぞれの自治体が心から望んで合併したのだとは言い難い。が、小異を捨て大同につかねば、財政のひ弱な自治体は政府の締め付けにあえび立ちゆかなくなるのも明らかだから住民は納得した。

■政治は利害の調整

「政治とは利害の調整だよ」と喝破したのは故田中角栄元首相だが、その一番弟子が先の政権交代で政権党の要職に就いたとき、豪腕と評される強権姿勢をちらつかせた。そのこともあってか党代表選に敗れ、今や政権党のアキレス腱の状態にある。まあ国政は脇に置くとして、我が町のような小さな町では施策の一つ一つを丁寧に町民に納

得させてゆく手間がかが望まれる。

■町融和は住民感情から

政策はその殆どを理事者が立案し議会に諮り決定される。もちろん議会に諮る必要のない施策も当然ある。そのような小さなものが意外と町民の利害感情を刺激するものだ。そこを丁寧に調整してゆくことで町民の新しい町への一体感が固まってくるのではないかと思う。

■思いがけない不評噴出

例えばこのところずっと岩城地区や生名地区でくすぶっている不満、全町一斉に鳴らされる時報の問題は、本番前に一定の試行期間を設けたにもかかわらずいざ実施されるといつまでも町民の不評をかこっている。

先年、光ケーブルの全町域敷設が完了し町内が一つのネットワーク(LAN)になった時点で、新たに設置し直した防災無線装置と各家庭内にある告知端末器を使って時報を流すことになった。朝7時、昼12時、夕方5時、メロデイは「七つの子」。

ところが各地区で不評が噴出した。防災放送の聞こえない地区の存在や音質の悪さはそれに拍車をかけた。行政には想定外の反応だったのではないか。

■夫々の事情を尊重する

従来岩城地区では定時放送と組み合わせた時報で、5時、8時、12時、15時、17時、22時。メロデイ「ミカンの花咲く丘」。生名地区では6時、12時、17時、22時。メロデイ「赤とんぼ」。弓削地区では7時、12時、18時、メロデイ「七つの子」。メロデイに関しては弓削地区

は弓削小校歌の作詞・作曲者本居長与の代表作。岩城地区はミカン、レモンの島だからと、時間設定や思い入れはそれぞれだ。

その後弓削地区では自治会連合が時間変更を申し入れ17時時が18時へと変更され現行となったと聞く。メロデイを含めこれまた他地区民のひんしゆくを買っている。

ときには行政側からテーマを出して

■町懇の在り方

時報は「慣れ」で済む話かもしれないが島である各地区をどうしても統一しないと行政運営上都合がわるい話でもなかろう。したがって各地区住民が長年日常生活の目安としていたものを変更するというのなら、じっくり調整を図るべきだ。役所の担当者が協議して決めるやり方よりも、理事者と町民との懇談の場「町づくり懇談会(町懇)」などで、町側から時間等を提案

し意見を聞いてからという方法もあったろう。

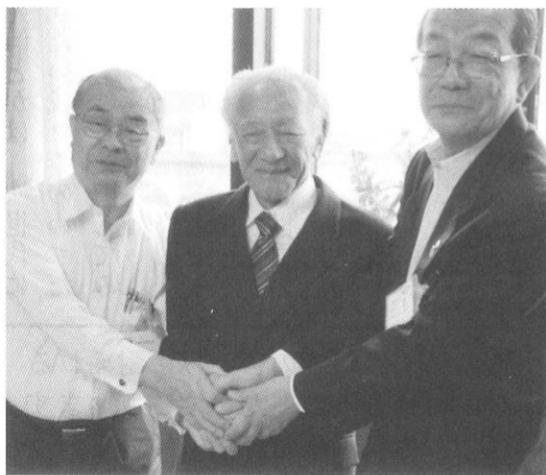
全ての人に都合のよいものはない。最後は多数意見の集約になるであろうが手を尽くしていれば町民の納得は得られやすい。

町懇は回を重ねるごとに住民の参加が減っている。今までのやりかたも見直し、事前に理事者(町)側からテーマを示し集中的に意見を聞く場にする方法論もあっていいのではないか。

(平山和昭)

菅井先生近況

写真・平成22年9月27日
松浦市役所



右・友広市長
中・菅井鷹島診療所長
左・寺澤副市長

元「魚島村僻地診療所」所長・菅井健二医師は、その後、僻地医を歴任され、現在、大野市三重町の高年齢者施設で勤務されている。最近長崎県松浦市鷹島の市立診療所へ赴任。期間の勤務の後また三重町に一定の予定と聞く。八五才。年日戻らな知らな

きんぐち

青木喜代子

町内の役員をしている夫が神戸の防災センターを視察に出かけた。この夏も信じられない位の大雨が降り被害が出ている。他人事ではないと思つたのか我が町でも自主防災の体制が出来つつある。

土産のチェックリストを片手に、夫とリュックに詰め直した何年も前に詰めたまままで乾電池は液漏れし、ばんそうこうも十円玉も変色している。

「万能ばさみは？」と私。さすがに夫が自慢げにサバイバルナイフを出して来た。新婚間もなく「これが欲しい」と。当時一万円くらいしたスイス製のやつだ。現実派のヨメは「いつ使うの？」「ありや便利で」と。買ってしまえばカチャカチャやっていたがいつの間にか私は忘れていた。懐中電灯はブロン振り回して使う電池不要のあれ。一応振ってみる。ラ

「ハイ、出来た！」と背負うとかなり重い。今はベッドの横でお守りのように鎮座している。一緒に視察に行った人に「我が家はチェックしましたよ！」

イターもカチャ、笛もピーツ。乾パンに黒鉛と。ああでもない、こうでもない、と遠足の前の晩みたいじゃと、不謹慎かも知れないけど、少し楽しみながら夫とチェックした。

と少し鼻高々に言うのと、「青木さん、神戸のようなのがきたら何をしてもだめよ」と涼しい顔をして言った。(くそ！アンタも中華街でおいしい焼売りを、豚マンを求めて行列しただけか！)

備えあれば憂いなし、天災は忘れた頃にやってくるんだ。みなさんチェック、チェック。





島は大きなホスピタル！でもホスピ足リ〜ン

情報過疎とはなんだ？

先月ある大手新聞社から取材を受けた。取材を受けたって記事になることがないのはいつものことだがその趣旨が、島の情報過疎が島の活性化の差し障りになっていることを検証するにあるらしいと聞けば、内心穏やかではない。情報が少ないので島は取り残されているというふうに聞こえるからだ。果たして

本当に足りないものは何か

町が元気というの、そこに住む人々が元気であるということだが、人々が元気であるためには最低限衣食住が足りていなければならぬ。そして「衣と食」は「医と職」の後押しがあって守られるものでもあるのを知らぬ者とおるまい。

「足りる」の基準をどこに置くかで幅はあるもののそれでも子

祉が行われているのか、そのサービスを提供する者、受ける者が泣顔なのか笑顔なのか・・・。

むろんそのNPOの活動は町で行われている福祉のごく一部だ。しかしこのレポートを読めば弓削の地での地域密着型小規模福祉の日常がよく見える。そしてこれが一番大事な現象だが、弓削に住む高齢者はそのNPOの利用者であることを恥じない。

- フェイス 0：痛みが全くなく とても幸せ
- フェイス 1：ちょっとだけ痛い
- フェイス 2：軽度の痛みがあり少し辛い
- フェイス 3：中程度の痛みがあり辛い
- フェイス 4：かなりの痛み とても辛い
- フェイス 5：耐え難い強い痛みがある

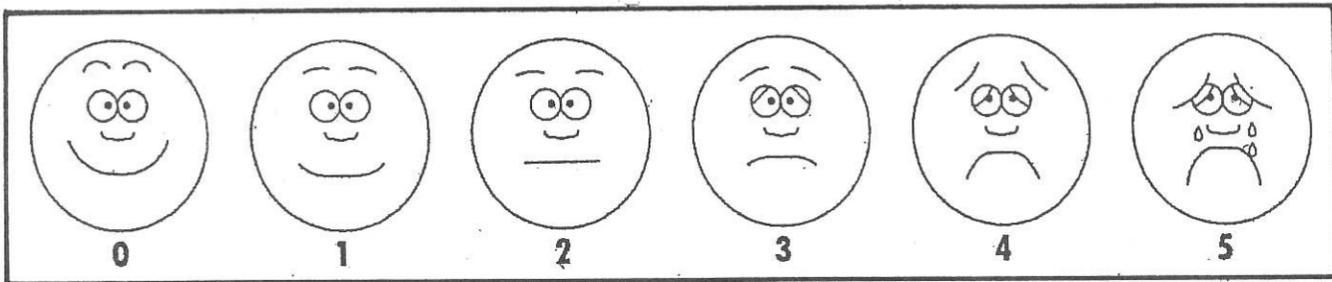
政がどうこうしたという内容ばかり。彼らの言う情報過疎とは、IT（コンピューターなどをつかった情報処理）のための社会基盤整備の遅れが町のへたりを素だと言わんばかりの内容だった。それでは他町村より先んじてそれに取り組んできたにも関わらず力が落ち続けていく我が町の実情の説明には全くなならない。

結果を出せない官なのか

最大公約数的記事が普通である新聞記事に目くじらをたてることもないが、町内には若い人らによって町を何とかしたいという活動がある。先に書いた「ふくふくの会」や「島の会社」あるいは岩城の「ぼんぼらんど」など、みな一所懸命地域情報やその活動を発信し、定住者の呼び込みと過疎化を押しとどめようと踏ん張って居る。それに比べ、行政がらみの施策や広報活動の、なんと熱意と意気込みと実績の乏しいことか。

光ケーブル敷設と同時に各戸に設置された告知端末。それすらいまだその持つ機能のごく一部しか活用されていない。そういう現実こそ、実は情報過疎や格差の実態であると思えて仕方がないのだが。（平山和昭）

今の痛みはどれですか？



そうなのかな？

身の回り情報だらけの中で

いまわが町では光ケーブルが全戸に引き回され、インターネットにつながれば世界中のあらゆる情報に接する事が出来る。もちろん新聞やテレビ、ラジオを通じても情報は入ってくる。国家権力によって情報が管理されている国と違い、すくなくとも我々は情報のるつぼに放り込まれていると言っても過言ではない。それなのに情報過疎とはどういうことだ？。では言うところの情報を得れば、私達の町は活性化するのだろうか。

どもは減りつづけ、町は勢いを喪っていく。カンフル剤として情報が注入されたとして、ではどうなるか。

情報が得られたとしてもその活用がされないのであれば無きに等しい。新聞社はそのあたりを問題視していたのだろうか。

若者の活動が町を救う

ひるがえって、町には色々な情報を発信している団体がある。新聞折り込みで弓削地区の各家庭に届けられているNPO法人（非営利活動法人）のレポートも立派な情報だ。

弓削の地でどういう高齢者福

もしこれがインターネットなどの媒体を使って町外に発信されれば、世間一般がこの町の上質さを知るところとなる。

知らせることの意味

民間で出来ている住民への報告に対し、では官はどれだけのレポートを町内外に発信しているだろう。そのあたりを考えたとき、宮仕えで禄を食んでいる者には、やはり襟を正す必要があるのではないかと思うところだ。

ところで、後に記事になった「情報過疎と戦う」と銘打たれた上島町をモデルにした件の記事は、ITインフラ整備の話、行

Information



クリスマスライブ 出演「ひまり」

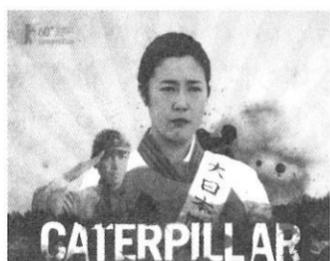
松瀬一昭（因島出身）、門松良祐

日時：12月25日 18：00～

場所：因島ポートピア・土生（土生港）

主催：土生町商店街連合会

問い合わせ：08452-22-8488



映画：

「キャタピラー」

監督若松孝二

寺島しのぶ

場所：シネマ尾道

12月17日まで

時間：10:00～

問い合わせ：0848-24-8222

次は大量のカセットテープ。掃除中のBGMとして流す。車の中ではCDしか聴けず断腸の思いで捨てることに。私がひとりやっていたら家計簿を見ては当時の財政状態をなつかしみ、テープを聴いて

人様にはゴミ？

ちよつと待って、これって他人様にはゴミ？



われの宝は

他人様にはゴミ？

まだ十一月というのに大掃除の天使が降りてきた。何をやっても飽きっぽい私がこの度は不思議なくらい持続する。手はじめに寝室を。タンスの上には気持ちいいほどほこりが溜まり山となつて居る。ハウスダストやらのアレルギーの人がこの部屋に入ったら一発だろうな。そう思うと我が夫婦はたかましいと妙に感心しつつ年代物の汚れと格闘する。

は様々な景色が走馬燈の如くで、とても片付くまい。大きなゴミ袋を、私は今日までゴミと寝とつたのかと、複雑な思いで眺めた。ゴミの回収コスト、発生するCO2のことを考える。とぞつとする。

今までもつたないか思い出るとか物に溜まる一方。でも年を重ねると処分する事も考えねばと、つくづく思う。それ

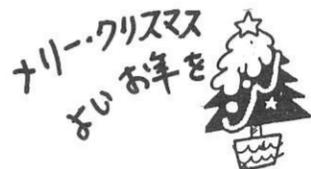
青木喜代子

きょうちゅう



eメール往来

◆インターネット・ユーチューブに「石山登山」のビデオを投稿したところeメールが届いた。



石山に岩登り観光スポットを仕掛けてみたらどうですか？

(着信)

石山にはハヤブサがいるのですか。石山の崖を見ていて思ったのだけど、石灰岩なので滑りやすいのかな？

こっちは平山何とかという世界的なフリークライマーがいて南町田のショッピングセンターの壁で教えていたらしい。そういうカリスマの、日本唯一のクライミング入門&トレーニングセンターや素人のお遊びコースができれば、景色は良いし、ハヤブサも見れるし仕掛け次第でずいぶんはやると思っ

うけどいかが？
こちらでは三浦半島や、房総の海に見える崖が人気スポットだそうです。(J・H)

(返信)

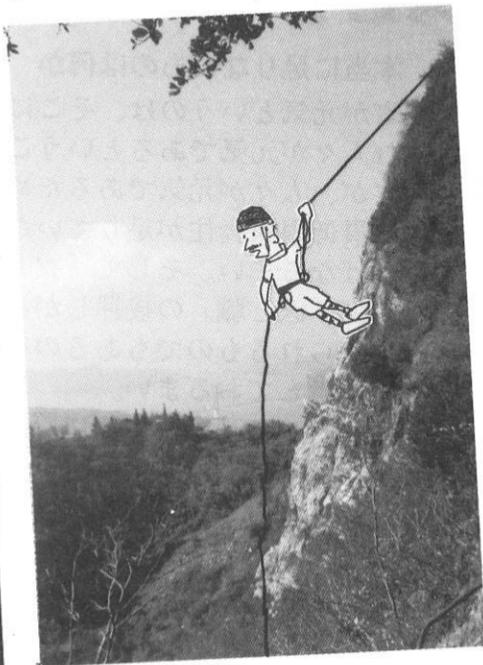
石山の面は石灰岩で、まあクライマーなら登れないことはないでしょうね。ムービーには映ってないけど面の下は露天掘りのあとで直径100mほどの谷になっている。つまりお椀のむこうがわとこちら側との関係で撮影しています。

「石山登山」をビデオにしてユーチューブにアップするつもりです。それには状況が映ります。露出した石灰岩のほかはバラスのような砂で崩壊しやすい。今でも年々崩れて顔の形が変わっている。ハヤブサは巣から200m以内に人が近づくと育雛中でも巣を放棄するといわれ、せつかくここで細々繁殖しているのを邪魔はしたくないなあ。

昔の泊まり小屋の残骸があるが展望台をとの話もあるようで、どうなるかわからない。せめて中腹ぐらいでとどめて欲しい気がする。山に登れば空き缶やゴミもほかすだろうし。昔、石を採掘していたころには四方からいける道があり、トンネルで谷底に通じているのでそれを整備しハイキングコースにするのもいいかな、とか。いずれにしろ現在はちょっと危ない場所が多い。生半可な整備なら怪我の素のような気がする。(平山)

【豆知識】ユーチューブ(YouTube)とは、インターネット上の動画投稿の場です。規約を守れば誰でも投稿することができます。最近では「尖閣ビデオ」が公開されて話題になりました。

◆◆◆「触らぬ神に祟り無し」ではホントのことは解らない◆◆◆



(着信)

そうですね、ハヤブサの巣が近ければ初春の巣づくりから夏の巣立ちまでは巣の場所をわからないような形で一定の範囲は立ち入り禁止も出てくるでしょう。そうすることにより人に対してはよりリアルな自然環境を訴えることができます。

フリークライマーは自然に気を使う人が多いので、問題は少ないと思

ますが一般の観光客はそうも行かないのでカラスなどが来ないようごみを出さないとか必要ですね。逆にはじめから環境との調和を前面に出した場所であれば、それはそれで大きなPR点になると思います。

私の居た研究所では、道路工事によるオオタカを中心とした猛禽類への影響調査を環境アセス+αで巨額の国費をかけたさんざんやっけていて、音、光、人影などの影響実態をかなり把握していました。これらは現在、それぞれ調査を発注した事務所の報告書になっているので請求すれば閲覧できます。営巣場所は特定できないようにしてありますね。

特に中心になって指導いただいている元大学教授は、別に道路事業に思い入れがあるわけではありませんが、環境省や旧来の鳥類研究所がやっているような双眼鏡と鉛筆の、遠くからの観察中心では実際のこととはわからない。触らぬ神にたかりなしという結論しか得られない。これでは本当の希少種の保護はできないという先進的なEPA(アメリカ環境保護庁)の考え方の実践者で、世の中の考え方を考えるいい機会とばかり、多くの道路事業の調査を指導されています。

調査をする人間はすべから木に登って雛の体重をすばやく計り、元に戻す技術を要求され、またご本人も70才を超えているのに現役で木に登り、調査員を集めてトレーニングもやっています。(J・H)

煩惱ライフ

ともぎ 安藤朋生 茨城県



山の木々が美しい色に変わり始めて眺めているともうその隣には冬の気配が・・・

1年が過ぎるのは早いものです。考えてみると不思議ですよ「季節を感じる」なんて。

時計のない時代には太陽や月の動きで季節を知り、種を蒔く時期を把握した生活をしていたなんて、本当に感慨深いと思うのです。そして昔々の人達の「生きる」と今現在の「生きる」事への意味も少し変わってきたように思います。

生きる事に目一杯な私達でも少しばかりの夢や希望は失ってしまいたくない!とは想いませ

んか?大なり小なり心に想う”夢”。

安藤にも僅かばかり夢がございいます。小石くらいの夢がゴロゴロ、目の前を通り過ぎてはまたゴロゴロと。夢は意外と転がります。

茨城から出たことのない私には茨城以外どこも別世界。ちょっと隣の栃木県さえ違う雰囲気味わえる私は結構安上がりになってます。ならば、いっそ、ビューンと遠くの島々に住んでしまったらこれはどんな事になるのか?!

若干の不安はあるものの、多分毎日素直に感謝しながら深く眠れる健全な魂が宿ること間違い無しでしょう。1日が終わる

黄昏、波音を聞きながら星空を眺める生活がどれだけ心を潤すか。ロハスだエコだと言うけれど、これが元来のライフではないだろうかと思うのです。

しかし夢と現実のギャップに打ちのめされ、沖縄やその周辺の島々に移り住んだ人達の約8割は生活に馴染めず戻すケースも多いといえます。理由のひとつには今までの生活水準を保つことが難しかったからだ。

石のお金で物が買えた時代もあったはずなのに。物々交換で生活出来る国もあるっていうのに。何にそんなに金が掛かっているのか理解に苦しみます。でもまあ人の欲は限りないとも言えるものね。

島に限らず他所で暮らすという事は、それだけで刺激的です。そう言うものの、自分を解放することが出来なかつたらむづかしい。

島であれどこであれ、何が必要で何が足りないか。日々に立ち向かう根性。ぎちぎちの心を解放する術を身につける努力。少々不便な生活を楽しめる心の余裕。これらを養わなかつたら今と違う生活を、なんて考えても無理というもの。

島に住んで島を満喫したい。空が青くなくてもいい。海が青くなくてもいい。島の空気を吸って心も体も潤したい。静電気よさらば!煩惱よ、さ〜ら〜ば〜!

小石くらいの私の夢、その砂浜で待っていて〜!



⑤